

デジタル化の進展とジェンダー平等



寄稿

独立行政法人 国立女性教育会館

独立行政法人国立女性教育会館 (NWEC) は、1977年に女性教育の推進を目的に文部科学省の附属機関として設置されました。2001年からは、男女共同参画を推進する拠点施設として、国内外の情報収集・発信、研修、調査研究、国際事業等を行っています。
ホームページ: <https://www.nwec.go.jp/>
所在地: 埼玉県比企郡嵐山町菅谷728番地



コロナ下において、デジタル技術の活用が急速に進みました。職場や家庭、学校において、ひとりひとりがPCやスマホを1台以上所有し、在宅で仕事をするこや、出張を伴わないオンライン打合せが可能になるなど、業務の効率化やワークライフ・バランスが向上し、仕事や暮らしの利便性に大きく貢献しています。遠隔授業や家にいながらの買物、オンラインで医療診断を受けるなど、あらゆるものがインターネットでつながるデジタル

アスをなくすための教材や動画を提供しています。成長産業であるAIやデジタル分野で働く女性が増えることは、女性の就労機会の創出のみならず、そこで作られる製品やバーチャル空間にも大きな意味があります。



理工系チャレンジャーズサイト



NWEC サイト

AIやデジタル空間には、無意識のうちに、開発者の偏った経験や現実社会の不平等が投影されている恐れがあります。例えば、スマホや電化製品に導入されたAIの多くが当初、女性の名前をつけられました。これは「女性は親切で親しみやすい」というイメージや、「女性は補助的な役割を果たす」といった偏見を助長します。NWECのHPに掲載されている、国際連合教育科学文化機関(ユネスコ)



NWEC YouTube チャンネル



NWEC グローバルセミナー

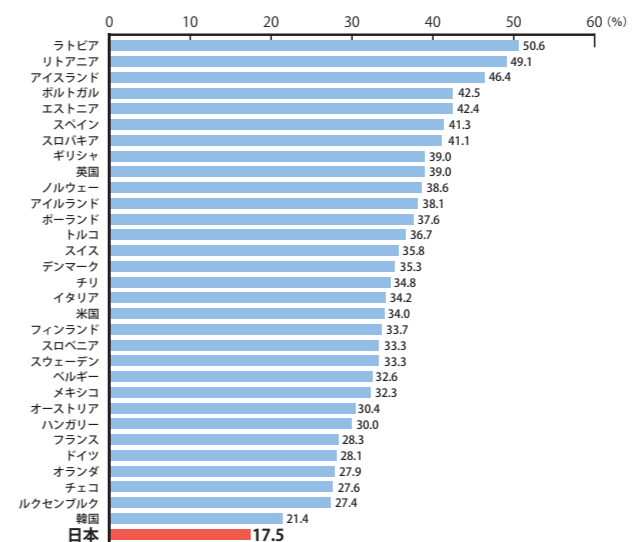


化社会により、私たちの生活の隅々までデジタル技術の影響と恩恵が広がっています。デジタル化の進展は社会のジェンダーギャップ解消とどのようにつながるのでしょうか？ デジタル社会はジェンダー平等の実現に役立つのでしょうか？ これからの未来に向けた課題はなんのでしょうか？

IT分野に女性が増えると 技術革新にも「女性の視点」が入る

毎年、ジェンダー平等を実現するために世界各国の代表がニューヨークの国連本部に集まり、「女性の地位委員会(CSW)」の年次大会が開催されます。今年の開催テーマは、「ジェンダー平等とすべての女性や女性のエンパワメントを達成するための、イノベーション、技術変革、デジタル時代の教育」でした。IoT、ビッグデータ、人工知能(AI)、ロボット、シェアリングエコノミー等によって、第四次産業革命ともいわれるデジタル・トランスフォーメーションが進む中で、次々と新しい産業やビジネスが生まれています。

新たな雇用の場で必要とされる技術や知識を習得することは、看護師は女性、エンジニアは男性が多いといったようなこれまでの性別による職種や業種の偏りを是正し、男女間の賃金格差の解消や女性の経済的自立を進める重要な転機となります。しかし、OECD加盟国の研究者に占める女性の割合(図)を見



研究者に占める女性の割合 (国際比較)
内閣府「男女共同参画白書」

ると、日本は最下位レベルです。また日本は自然科学や数学、工学など理工系分野の女性の進学率も最下位のレベルであり、諸外国に比較しても、理工系への進路を選択する学生や、IT・デジタル産業で開発等に従事する女性が少なくなっています。

その背景には、理工系分野の職場も男性中心型労働慣行であり、活躍する女性のロールモデルが見えづらいといった課題があると考えられます。また、大学で理工系分野に進学する以前の小中学校時代から、家庭や学校において、女子は理工系分野に向かないといった無意識のバイアスも影響していると考えられます。国立女性教育会館(以下、NWEC)や文部科学省、内閣府では、女子生徒の関心や意欲をそいでしまう周囲の大人によるバイ

の専門家による講演や動画「AIとジェンダー」では、現在、機械学習やAIの仕事に従事している大半が男性であり、強靱で豊かな社会をつくるためには多様性が求められる点がわかりやすく解説されています。これまで周縁的な立場に置かれていた女性を含めあらゆる人々が、デジタル技術やAIの開発において、中核となって活躍できるように教育や働く機会を確保していくことが求められています。

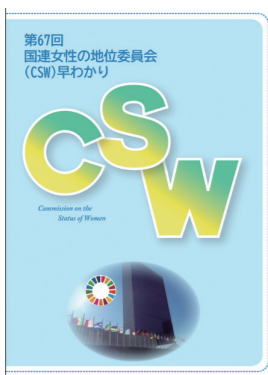
女性の安全のための アプリ開発も

デジタル技術は私たちの生活のいたるところで活用され利便性向上に役立っています。多様な人の経験や知識によって、技術が解決する課題はより豊かになります。たとえば、子育て、家事、介護等の無償ケア労働の現場の問題を、アプリやAIを活用したロボット技術を活用した取組によって女性が先導しています。また、女性が移動することに暴力や恐怖の危険が伴う地域や場所では、安全な移動を可能にするアプリ「セーフティピン」が、女性が働き、学ぶ権利を守っています(NWECグローバルセミナー事例)。開発内容に偏りを生じさせないためにも、女性をはじめ多様な人々が、データ収集を含めて開発のあらゆる段階に携わることが重要です。

現実もデジタル空間も ジェンダー平等へ

最後に、デジタル技術は便利だけでなく、克服しなければいけない課題も抱えています。オンライン上のプラットフォームで、遠方の人や見知らぬ人も無限につながりを広げていくことができる反面、バーチャル空間において女性に対する差別的発言が放置され、固定的に偏った外見や女性性が強調されるルッキズムの増長が生じています。バイアスがかかったデジタル技術が差別や不平等、暴力などの行為を驚異的なスピードで増幅・拡大させてしまう負の側面への対策は、国を超えた喫緊の課題です。

UN Women(国連女性機関)事務局長は、CSW年次会合の最後に、今がジェンダー平等なデジタル社会を実現していく大転換期であると発言しました。デジタル技術やデジタル空間には、現実社会に存在するジェンダー不平等が拡大して反映されます。デジタル技術やデジタル空間をあらゆる人が安心して活用していくためには、現実社会でのジェンダー平等が必要です。



第67回 国連女性の地位委員会 (CSW)の概要や解説を掲載した小冊子